目次

プロローグ……001

第Ⅰ部　書物の旅路

キリスト教世界を生き延びた原子論

第一章　修辞的カノン……015
第二章　ヴィクトリア朝の桂冠詩人……057
第三章　写本の発見と復活劇……089

第Ⅱ部　作品世界を読む

原子と空虚が生み出す世界

第一章　物質と空間……181

第二章　原子の運動と形……193
第三章　生命と精神……213
第四章　感覚と恋愛……233
第五章　世界と社会……239
第六章　気象と地質……253
エピローグ……267
参考文献……273
あとがき……281

装丁＝森　裕昌

一、本書は第Ⅰ部第二章までを小池が執筆し、第Ⅰ部第三章以降は瀬口が執筆、また本書全体について瀬口が調整を行なった。執筆の経緯については巻末の「あとがき」を見られたい。

一、ルクレティウス『事物の本性について』からの引用は、第Ⅰ部第一章と第二章に関しては小池澄夫訳が用いられ、それ以降の引用は翻訳者の名前が記載されているものをのぞき、藤沢令夫・岩田義一訳の訳文を使用し、それぞれに必要と思われる変更を瀬口が加えている。

一、引用文中の〔　〕は筆者による補足である。

一、古代の固有名詞については、原則として母音の長短は区別せず、音引は省略した(例、「プラトーン」ではなく「プラトン」)。また、引用する文献の書誌情報における固有名詞の表記は、その文献での表記どおり示す。

プロローグ

いつか大地を滅ぼす日の来るときがあれば、そのとき
崇高なルクレティウスの歌も滅びることになるだろう。
――オウィディウス

――ルクレティウスって、どういう人だったのですか。
――人名辞典をみるとか、今ならインターネットで調べたらいいでしょう。
――ネットはのぞいてみたんですよ。『ウィキペディア』だと、「ティトゥス・ルクレティウス・カルス(Titus Lucretius Carus, 紀元前九九年頃―紀元前五五年)は、共和政ローマ期の詩人・哲学者。エピクロスの思想を詩『事物の本性について』に著した。エピクロスの宇宙論を詩の形式で解説。説明の付かない自然現象を見て恐怖を感じ、そこに神々の干渉を見ることから人間の不幸が始まったと論じ、死によってすべては消滅するとの立場から、死後の罰への恐怖から人間を解き放とうとした。六

巻七四〇〇行からなる六歩格詩〔ヘクサメトロスのこと。本書一〇頁参照〕『事物の本性について』(ラテン語：De rerum natura)を著して唯物論的自然哲学と無神論を説いた」としかなくて、英語のほうも見たら、こちらはずいぶん記事が多くて充実しているみたいです。でもあんまり英語を勉強しなかったので、よくわかりませんでした。

'Very little is known about Lucretius's life; the only certain fact is that he was either a friend or **client** of **Gaius Memmius**, to whom the poem was addressed and dedicated.'

翻訳機械にかけてみたんですが、チンプンカンプン。

「ルクレティウスの人生についてはほとんど知られている。唯一の確かな事実は、彼がガイウス・メンミウスの友人またはクライアントであり、詩の宛て先であり献身的だったことです」ですって。

——うーむ。英語力というより普通の日本語の読み書き能力のほうに問題がありそうですね(笑)。

「ごくわずかのことしかルクレティウスの生涯については知られていない。唯一の確かな事実は、ガイウス・メンミウスの友人かクライアントであったこと、そしてこのメンミウスに宛ててその詩を献呈したということだけである」。太字のところは注がついているのかい。

——クリックすると、「クライアント」とは何か、「メンミウス」とは誰かについて検索できるようになっているんです。

——へぇー、そりゃすごい。クライアントはラテン語ではクリエンテース、これは名詞の複数形で、単数はクリエンスですけどね。有力貴族の庇護下にある平民の人たちで、定期的に下賜物なんかもあ

るんですが、その代りお返しの奉仕もしなければならない。庇護者やその関係者が選挙に立候補したら投票するとか。この庇護者のことをパトローヌス(patronus)といいます。

――パトローヌスはパトロンの語源みたいですね。そうすると、ルクレティウスは平民階級の人だったんですか。

――ルクレティウス並みのギリシア哲学や文学の素養は、小さい時からギリシア語が習える環境にあった人でないと無理のように思われます。ローマの平民に家庭教師を雇う経済力はないから、今でいう文学的パトロンのような意味だったらともかく、メンミウスとは友人の間柄だったというのが穏当なところでしょう。『事物の本性について』の第一巻の序歌のところで、女神ウェヌス(ヴィーナスのことですよ)への祈りがあって、そこにはじめてメンミウスの名が登場します。正確にいうと、「メンミウス氏族の裔」ですけどね。引用箇所の表示は、巻と行を中黒(・)で区切って漢数字で記しておきます(例、一・二五―二八)が、原詩そのままに行分けして翻訳するのは不可能なので、まあ適当にやらせてください。

この詩は、事物の本性について書き綴り、また
われらがメンミウスに宛てたるもの。
その人こそは、女神よ、あらゆる機会に貴方が栄誉で飾り、
誰よりも秀でんことを望まれし者。さればなおさらに一層

わが言葉に、女神よ、とこしえの魅惑を授け給え。

（一・二五―二八）

――それで、このメンミウスはどういう人なのですか。

――これは実在の人で経歴やエピソードも伝えられているのですが、ちょっと紹介する気になれない。つまらない人物ですからね。詩の中で語りかけられているキャラクター属性は、「詩の嗜みがある読書人」というのが一つ、もう一つは「政治的人間」、こちらは非エピクロス派ということです。で、ルクレティウスは、結局は失敗に終わっているんですが、この人にエピクロスの哲学を教えることによってエピクロスに帰依させようとしている。

――できの悪い教え子ということですか。

――年少の友人だったかもしれない。これはルクレティウスが部分的に模倣したギリシアの哲学詩人エンペドクレスの「聴け、パウサニアスよ」の影響もあるでしょうね。それから、このメンミウスという名は十回以上出てくるのですが、個人的な色彩はどんどん薄れていきます。

――ということは？

――ルクレティウスは自分の語りかけている聴衆をメンミウスと呼んでいるだけで、実在のメンミウスはあまり関係ないと解することもできる。ルクレティウスは自分の作品が、一定数の観客を相手に劇場で演じられたり、朗誦されたりするものではなく、文字で書かれた詩であることを明確に意識

していています。だから、ここでは聴衆ではなく、書物文学において想定される読者が造型されている。

――それじゃ、メンミウスは読者であるわたしを指していると考えてもいいのですね。

――ルクレティウスはこのメンミウスを愚鈍にみせて、読者が聞き手ではなく、むしろ語り手に同一化するように工夫したというような穿った解釈もありますけどね。

――ほかに変な記事もありました。媚薬を飲用して発狂し、自殺したとか。

――ひとの話を聞いてないな。その記事はまずガセネタのたぐいですけど、英国のヴィクトリア朝時代の詩人テニスンのところでお話しましょう。

――ルクレティウスは日本ではどう読まれていたのでしょうか。

――通読した人はあまりいなかったんじゃないかと思う。でも、そういう読者の中にとても優れた人がいて、いままでにルクレティウスについて日本語で書かれた最高の文章を残しています。

今からもう十余年も前のことである。私は誰かの物理学史を読んでいるうちに、耶蘇紀元前一世紀のころローマの詩人哲学者ルクレチウス(紀元前九八―五四)が、暗室にさし入る日光の中に舞踊する微塵の混乱状態を例示して物質元子の無秩序運動を説明したという記事に逢着して驚嘆の念に打たれたことがあった。

(寺田寅彦「ルクレチウスと科学」二〇七頁)

——カーテンの隙間から朝日がさす時なんかも、埃が舞ってるのが見えますね。

——私も子どもの頃、納屋に入ったときに、そんな光景を目にした記憶があります。ルクレティウスはそれをこんなふうに描いています。

暗室に太陽の光線が射し込むと、無数の微粒子が
光を浴びて乱舞しているのが見られるだろう、
それは永劫に終わりのない戦争のごとく
隊形を変えてはまた、波状攻撃をしかけ
離合集散を繰り返して、やむことがない。
ここから想像できるだろう、原子が
広大な空虚の中を不断に運動するさまが。

（二・一一四—一二二）

まだまだ続くのですが、いまはここで打ち切って先の寺田寅彦の続きを引用しときましょう。

実に天下に新しき何物もないという諺を思い出すと同時に、また地上には古い何物もないということを痛切に感じさせられたのであった。

――かっこいいですね。（でも『事物の本性について』なんて、硬いタイトルだなあ）「事物のほんしょう」って何ですか。

――何を言ってるんだか。本性という言葉は、本心とか、生まれつきの姿や性質とかの意味だから、「化け物が本性をあらわす」というような成句がありますが、哲学用語としては、「ほんせい」と読んで、ギリシア語のピュシス(physis)、ラテン語のナートゥーラ(natura)の訳語に当てられてます。

――英語のネイチャーと同じなんですね。『事物の本性について』より『自然について』のほうがいいんじゃないかと思いますが。

――いいのですけど、日本語の「自然」は「花鳥風月」「草木虫魚」で、それから四季のうつりかわりに限定されているから、いまひとつ正確でない。それから、『自然について』はエピクロスの主著のタイトル名の訳にしておく(今は残っていない本なので、手抜きする)と、ルクレティウスと区別するのに都合がいい。

――なんだか、いい加減なお話ですね。それで、その「事物の本性」は自然ということでは言いつくせないとすると、どういう意味になるのでしょうか。

――哲学事典式に説明すると居眠りされかねないから、ソクラテスが刑死する最期の日の対話を綴ったプラトンの『対話篇』から引用しておきましょう。そこでソクラテスは若い頃に熱中した「自然についての探求」を回顧しています。この「自然」を「事物の本性」に置き換えて引用しましょう。

若い頃、私が驚くほど熱中したのは、あの「事物の本性についての探求」と人々が呼んでいる知恵であった。私はその知恵の威容に目をみはった。それぞれのものの原因を知ること、それぞれのものは何によって生成し、何によって消滅し、何によって存在しているのかを知ること、それは断然他を圧して素晴らしいことに思えたのだ。

（プラトン『パイドン』96A）

――それぞれのものの原因といっても、あらゆるものについて探し求めようとすれば、きりがないですね。

――若いソクラテスの場合、生物の発生、認識のはたらき、天空と大地の諸事象がメイン・テーマでした。この「自然探求」の重要な性格は、自然の現象の説明にあたって、自然の中にあるものだけで説明するということです。

――どういうことでしょう。

――超自然的原因を排するということ。そうですね、これも引用しておこう。「われわれの知る働きは、血液によるのか、空気や火によるのか、それともまたそのいずれでもなく、脳髄が聴くとか見るとかの感覚をつくりだし、そこから記憶と判断が成立し、この記憶と判断が固定すると、それによって知識が生じるのか」（『パイドン』96B）というような考え方です。

――いまひとつ、わかりません。

――事物の本性というのは、宇宙のすべて(ということは、私もあなたもです)は、原子と空虚(これは隙間でもいいですね)とから出来ているということです。

――心もですか。

――心というのは、中枢と末梢の神経系のはたらきということで、神経をつくりあげているのは、骨や肉や血をつくっているものと同じ。だから原子です。ただ、人の場合、言葉がこれに加わるので、かなり複雑なはたらきになる。そうすると、心というのは一つには記憶なんだろうね。あと、「嘘をつくな」とか言われたことがあるでしょう。言葉が真実と虚構に分離する、これが心の誕生です。

――そんな説明ではわかりません。どうしてルクレティウスはそういう話題を、わざわざ韻文で書いたのですか。

――散文ならもっと楽に書けたと思ってるんですね。そうとはかぎらない。だいたい古い時代の教育は詩の暗誦が主たるものだったので、詩のほうがわかりやすいし、書きやすかったんですよ。

――それじゃ「嵐の海」というのは?

――プロローグが長くなりすぎた。ちょっと休憩。その間に次の二行を暗誦しておいてください。

Suāue, marī magnō turbantibus aequora uentīs,
ē terrā magn*um* alterīus spectāre labōrem;

――どう読むのでしょうか。

――ローマ字読みでいいのですが、ラテン詩の韻律はギリシア詩と同じように、音の長短からできていて、これはヘクサメトロスという叙事詩の韻律、一行が長短短(また長長も混ぜて)六脚の韻律で書かれてます。

――長短というのは、母音「あいうえお」の長いのと短いのがあるということでいいのですか。

――長短は音節単位です。長母音を含む音節はもちろん長音節ですが、たとえば mag のように短母音でも子音で終わる音節に含まれると、その音節は長になります。語尾の m は弱い音で、次に母音があると消えてしまう。イタリックにした部分(um)は、続く母音に融け込んで、magn' alterīus(まぐなるてりーうす)だけど、ターー・ターータタ・ターーという韻律なので、長母音の「いー」が割れて、magn' alteri-ius(まぐ・なーてり・ゆす)になります。日本語表記では子音と母音の区別がないので、短い音節が長く読まれてしまう。だから、ちょっと変則的に誇張して書いてみましょう。

Suāue, ma | rī mag | nō || tur | bantibu | s aequora | uentīs

すぁーうぇま・りぃー**まぐ・**のー　とうる・**ばん**てぃぶ・**さぇ**こら・**うぇん**てぃーす

太字になっているところは、アクセントがつきます。ギリシア語やラテン語は日本語と同じく高低ア